

7

純情漫画革命

雑誌としての『九番目の神話』について

李信暎

はじめに

日本の少女漫画のような女性向けのジャンルは、韓国にも存在する。現在アジアでも注目されるほどの競争力を持つようになっている純情漫画である。この純情漫画は、1956年のキム・ゾンレによる『永遠の鐘』から成長し始めたものの、1970年代に急速に衰退し、その後1980年代に復興期を迎えた。最初は、貸本漫画という長編漫画の形で人気を博していたが、1988年に創刊された純情漫画初の雑誌『ルネサンス』が1990年代の純情漫画誌ブームの先駆けとなった。雑誌という純情漫画にとって新しいタイプの出版形態は読者層を広げただけでなく、作家志向の若者にデビューの場を与え、純情漫画の成長において大きな役割を果たし、新人作家をも育てた。また、女性専用のコミュニケーションの場がなかった当時、こういった純情漫画誌は、作家と読者のコミュニケーションの場を創るきっかけにもなった。

このような役割を果たした最初の純情漫画誌『ルネサンス』は、出版社のイニシアチブではなく、むしろ同人誌をその起源としている。具体的に

は1985年に、純情漫画のプロ作家9人が組んだグループ「ナイン」の同人誌『九番目の神話』である。漫画評論家のパク・インハは『九番目の神話』について「家で読める『雑誌』や『所蔵用の漫画』を求める読者の要望を満たしたもの¹」だったと評価している。また、漫画史家のソン・サンイクによると、『九番目の神話』は、1970年代以降、全般的に低迷していた純情漫画分野の再跳躍の可能性を提示し、それをきっかけに1988年以降の純情漫画雑誌の発行が多くなったという²。ソン・サンイクのこの評価が示すように、『九番目の神話』は韓国初の純情漫画誌と言われる『ルネサンス』の起源と考えられている。

本論では、「ナイン」が発行した同人誌『九番目の神話』に焦点を当て、韓国の純情漫画の発展にどのような影響を及ぼしたかを確認する。そのため、以下ではまず第1に「純情漫画」というジャンルの概念について触れる。第2に、韓国の漫画雑誌史について顧み、最後に、当時純情漫画の主流であった貸本屋漫画（デボンソマンファ）から雑誌の全盛期を迎えるまでの間、『九番目の神話』が果たした役割について、それに掲載された記事を『ルネサンス』のそれらと比較する。

1 純情漫画の概念

パク・インハによると「純情漫画」は慣習として女性たちが読むロマンチックな漫画だと思われる。辞書によれば、「純情」は「無邪気で、真実で綺麗な愛」を意味するとある。従って、純情漫画とは、無邪気さや真実で綺麗な愛を描いた漫画だという意味になる。しかし、辞書の定義には「純情漫画と呼ばれる漫画」が含まれていない⁴という。現在「純情漫画」は単に日本の「少女漫画」と同じ意味で使われている。つまり、主に女性という性別による読者層を想定した上、視覚表現と物語展開に特殊性をも

1 「もう海外で漫画が九番目の芸術と認識されているし、そしてこれから漫画を芸術として発展させる意図から「ナイン」という名前を付け、九番目の芸術を実現したいという望みから同人誌のタイトルを『九番目の神話』にした。」(ナイン、1985: 256)。

2 パク・インハ、2000年、p. 185。

3 ソン・サンイク、1998年、p. 346。

4 パク・インハ、2000年、p. 15。

つ韓国の女性漫画の総称である。

韓国の漫画論では、純情漫画の絵柄は1956年にキム・ジョンパが発表した『白雲が行く所 (흰구름 가는 곳)』に見られるが、純情漫画の起源としては1957年4月に発表されたハン・ソンハクの『永遠の鐘 (영원의 종)』に求める⁵。

韓国の純情漫画は日本の少女漫画と同様に、最初は男性の作家に制作されていた。ストーリーとしては1950年代後半から1960年代前半までの間、家族との和合や少女家長の活動などが人気を博していたが、それは韓国戦争直後という時代を背景にしていたと考えられる。

日本の少女漫画は女性作家の登場により、造形的な美しさや新しいコマ割りが表れて女性特有のジャンルとしての人気を増していたが、韓国の純情漫画にも同類の現象が起きた。つまり、1960年代末から活躍し始めた女性作家の作品は、少女の読者を漫画の世界に導いたのである。特にミン・エリヤオム・ヒジャは、男性作家とは異なる華麗な絵柄を採用しながら童話を漫画化し、ミステリーなどの多様な物語内容をもって人気を集めていた⁶。当時、キャラクター造形やコマ構成において日本の少女漫画に影響を受けたことは事実であるが⁷、男性向けの漫画が支配的だった韓国漫画の中で純情漫画の可能性を開いたのも確かである。

1970年代に入ると特に純情漫画は急激な衰退を迎える。その原因として挙げられるのは、独裁政権の下で行われた事前審査による反復的ストーリーの量産が読者の需要を減少させ、作家たちを絶筆させる結果を招いた⁸。

韓国の純情漫画が1970年代に衰退していたのに対し、日本の少女漫画は1960年代末から持続的に成長してきた。1970年代に入ると、萩尾望都、竹宮恵子などの新規の女性作家が中心になって耽美主義的な作品を発表したが、池田理代子は『ベルサイユのばら』において恋愛物を超える、以前、

5 絵本に近い『白雲が行く所』とは異なり、『永遠の種』はコマ割りがあるので、それを純情漫画の起源と見なしている。ソン・サンイク、前掲書、pp. 292-293。

6 パク・インハ、2000年、p. 53。

7 キム・ソウォン、2013年、pp. 72-73。

8 パク・インハ、2000年、pp. 71-72。

少女漫画に相応しくないとされていた歴史を描くことによって、読者層の拡大に成功していた。

純情漫画の復興は1980年頃から始まる。1979年KBSで放送された『キャンディ♥キャンディ』の人気によって、その漫画原作や『ベルサイユのばら』などの海賊版が発行され、読者だけではなく、女性作家たちにも影響を及ぼしていた¹⁰。1980年代から活動を始めて、現在代表的な純情漫画作家となっているファン・ミナは、当時『キャンディ♥キャンディ』の海賊版を読んで、襲撃を受けたという。特にコマごとに表情が変わるのをみて驚き、自分もそのよう表現を目指してみかったと回顧している¹¹。純情漫画が衰退していた1970年代、日本の少女漫画のブームが、韓国の純情漫画が復興に向かう原動力となったのは確かである。

2 韓国の漫画雑誌

韓国において雑誌は1940年代後半、漫画業界を主導するほど盛んになっていた。新聞連載や児童漫画などを描いていたキム・ヨンファンは、1948年9月15日以来存在していたタブロイド判の『漫画行進』¹²を、1949年3月13日から、週刊誌であった『漫画ニュース』¹³に創刊し直した。『漫画ニュース』はキム・ヨンファンをはじめ、キム・ソンファン、シン・ドンヒョン、イ・ヨンチュンなどを作家としており、草創期には平均4万5千部発行部数ほどであった。1950年の韓国戦争の勃発で『漫画ニュース』の発行は中止されたが、前述のキム・ソンファンは避難中にも関わらず、成人向けの時事漫画雑誌『漫画漫文展覧会』および『漫画天国』¹⁴を出版するほど、漫画に対する熱望は強かった。

1956年2月、韓国初の児童向け月刊漫画誌として『漫画世界』が創刊した。

9 米沢嘉博、2007年、p.234、また、押山美知子2007年、p.156参照。

10 バク・インハ、2000年、p.79参照。

11 ネイバーキャスト、ファン・ミナのインタビューによる。

12 『漫画行進』、1948年9月15日創刊、2号で廃刊。

13 『漫画ニュース』、1949年3月13日創刊、1年間ほどの発行期間。

14 ソン・サンイク、1998年、pp.22-28、また韓国コンテンツ振興院ホームページ参照：<http://koreancontent.kr/778>（最終確認2015年1月5日）。

1950年代後半、『漫画世界』は『少年少女万歳』と共に、児童漫画雑誌を代表し、その全盛期を導いていた。『漫画少年』、『漫画学生』、『七天国』、『漫画王』、『明星』、『漫画王国』などの雑誌もこの時期に発行されたが、しかし作家が足りず、やがて続々と廃刊するようになった。¹⁵

漫画雑誌は1960年代以降、再び復興期を迎える。この時期の漫画専門雑誌の中で1969年に発行された『漫画王国』¹⁶は後続の児童漫画雑誌のモデルの役割を果たし、1985年に創刊された『漫画広場』¹⁷は漫画に関する評論を定期連載することで、韓国漫画の文化的位相を成立させることに貢献した。また、1987年初頭に創刊された『週間漫画』¹⁸は成人漫画雑誌の時代を導いたといえる。しかし純情漫画は、人気があった1960年代末や1980年代の復興期にも、それを専門とする雑誌が一切存在していなかったのである。【図1参照】【図2】

1982年に創刊された『宝物島』²⁰などの少年向け雑誌の成功で、韓国の漫画雑誌は1980年代末から1990年代までの間、全盛期を迎え、大量に出版されていた。1988年11月から韓国初の純情漫画専門雑誌である『ルネサンス』が創刊され、その後、『ハイセンス』²¹や『デンギ』²²、『タッチ』²³、『カラー』²⁴、『イシュー』²⁵、『ウイंक』²⁶などの雑誌も登場し、少年向け漫画誌に負けられないほど好況になるが、2000年代に入ってから急速に衰退する。それは主にIMFによる不景気が原因で増加した貸本屋により、漫画販売市場が崩壊した結果であった。また、ネットによる無料漫画の連載も理由

15 ソン・サンイク、1998年、pp. 111-115。

16 『漫画王国』、1969年11月～1973年。

17 『漫画広場』、1985年12月～1993年。

18 『週間漫画』、1987年～廃刊。

19 ソン・サンイク、1998年、p. 168。

20 『宝物島』、1982年10月～1992年10月。

21 『ハイセンス』、1989年～1994年。

22 『デンギ』、1991年11月～1997年9月。

23 『タッチ』、1993年5月～1995年7月。

24 『カラー』、1993年12月～1994年。

25 『イシュー』、1995年12月～現在。

26 『ウイंक』、1993年12月～現在（ウェブマガジン）。

の一つである。²⁷【図4】【図5】【図6】【図7】【図8】

3 1980年代の純情漫画における「ナイン」と『九番目の神話』の役割

前述したように、1980年代に純情漫画は復興期を迎えるようになる。1980年に、ファン・ミナは『月刊少女時代』で「イオニアの青星」を連載し、1983年に、キム・ヘリンは貸本漫画である『北海の星』²⁸を、また1984年にシン・イルスクは『ライオンの王女』を単行本として出版することによって女性読者を呼び戻すことに成功していた。【図9】【図10】【図11】

しかし、1980年代に、純情漫画の発表は女性雑誌か、1960年代から1980年代の間ブームとなっていた漫画房（만화방: マンファバン）という資本家専用の漫画（대본소만화: デボンソマンファ）という長編漫画本の形態でしか出版されなかった。このような出版形態によって、作家が描いた漫画を読者に一方通行的に提供することしかできなかった。そのような状況で現れた「ナイン」は、ファン・ミナ（황미나）を中心に、イ・ジョンエ（이정애）、イ・ミョンシン（이명신）、キム・ヘリン（김혜린）、キム・ジン（김진）、シン・イルスク（신일숙）、ソ・ジョンヒ（서정희）、ファン・ソンナ（황선나）、ユ・スンヒ（유승희）といった9人のプロ作家によって結成された。「ナイン」は、1985年から1987年まで同人誌『九番目の神話』を3号まで発行したが、その目標として、漫画表現を真剣に探求することと、理解し合えながら成長していくことを挙げていた。これは同人誌『九番目の神話』の1号における「Art サロン」という記事で述べられている。

「漫画グループ「ナイン」は漫画を愛している若い世代の間に存在する「お互いに理解し、お互いに成長するように」という共感の願いから発足しま

27 パク・インハ、2011年、pp. 65-66。パク・インハによると、1997年制定・公布された青少年保護法は過度の成人向けコンテンツの取締りにつながり、市場の円滑な動作を防いだ。また1997年 IMF だった韓国において、小資本の創業モデルとして脚光を浴びた資本家が漫画の販売市場の崩壊を招いたという。

28 キム・ヘリンのデビュー作品である『北海の星』は図書出版プリンスから1983年から1987年にかけて発行されていた（16冊で完結）。

した。[略] 我らが現在すべきことは、漫画の本質を言う前に、それをより深く探求し、漫画というものの真実を知って、自分の作品に関して、徹底した批判と意識の覚醒を通じた自身を成長させることであり、その方法の一つとして作品集を作りました。[略] ナインが追求するのは、漫画を通じて知識の伝達でもなく、単なる娯楽でもありません。私たちの人生観と思想、哲学が存在する本当の漫画を描くことで、読者に深い感動と自分の内面を省みるきっかけを与えるためであり、また、自分に対しても同様となることを願っています²⁹」

当時、純情漫画作家として活動していた「ナイン」のメンバーは同人誌形式の『九番目の神話』を通して、事前審議制度の下の純情漫画から脱皮しながら、自分の人生観や思想を直接表現する作品を発表しようとしていた。プロ作家にとって、作品発表にはいろいろな制約が存在していたが、審査を避けるために、作品をグループ活動の一環で非売品の同人誌として発表する道があった。「ナイン」はその道を歩むことで、他の媒体で発表された作品よりも自由な表現ができるようになった。

さらに注目に値するのは、以前、存在してなかった女性だけのコミュニケーションの場としての役割である。つまり、「ナイン」は同人誌『九番目の神話』を通して作家と読者の間に相互コミュニケーションの場を作ろうとしていた。この『九番目の神話』の革命的な試みは純情漫画の読者層の拡張に寄与することや韓国初の純情漫画雑誌である『ルネサンス』の創刊の原動力にもなった。以下では、『九番目の神話』が果たしたコミュニケーションの場としての役割を理解するために、それに掲載された記事を中心に確認する。

4 『九番目の神話』によるコミュニケーションの場としての役割

『九番目の神話』が、作品以外にも企画取材や記事において多様な試みを行ってきた事実は表1の通りである。特に作品だけではなく記事を通し

29 ナイン、1985年、p. 256。

て、作家と読者とのコミュニケーションの場を作ろうとしたのが目立つ。ここでは記事を通して『九番目の神話』によるコミュニケーションの場としての役割を検証する。

4-1 記事「自由寄稿欄（漫画評論）」、「ナイン郵便箱」

『九番目の神話』1号で「自由寄稿欄」の投稿についての募集広告があった。それをみると、漫画に対してどのような諸意見も受け入れると言われている。

「読者の投稿で作られる自由寄稿評論欄に評論を掲載したい方は、まず、原稿紙 20~30 枚ほどの長さで現在出版されている漫画を対象にした文章を書いてください。形式は自由ですが、主観的ではない内容となるようお願いいたします³⁰」

「自由寄稿欄（漫画評論）」は漫画評論の性格が強かったので、『九番目の神話』2号には漫画家であるパク・フンヨンが担当していた。そして、3号には「自由寄稿欄」と「漫画評論」を分け、「自由寄稿欄」を漫画家イ・ヒジェに、「漫画評論」を漫画評論家であるチェ・ヨルに依頼して担当してもらっていた。「自由寄稿欄（漫画評論）」は漫画についての諸意見を受け入れたいという「ナイン」の要望によるものだったが、評論の性格が強かったので一般の読者にとって参加しやすくはなかったと思われる。

「自由寄稿欄（漫画評論）」と共に、『九番目の神話』1号に募集したコーナー「ナイン郵便箱」は漫画自体についての見解という広範囲ではなく、『九番目の神話』の掲載作品についての感想や「ナイン」の作家へのお願いなど、読者のもっと具体的な意見を受け付けることにした。

「九番目の神話はナインが魂をこめて作った最初のウタです。喜びや恐怖、ときめきの中で、この本をお読みにになった読者たちの投稿をお待ちしております。内容は、本書に関しての所感や要望、その外にも漫画グルー

30 ナイン、1985年、p. 257。

プナインへのご希望などを送って頂ければ、出来る限り掲載します³¹

「ナイン郵便箱」は、雑誌でみられる読者ハガキのような形式を通して、読者の声を直接に受け入れようとした。実際、「ナイン郵便箱」に読者の意見を掲載したのが確認できないが、このようなコミュニケーションの場は貸本漫画においては不可能であった。「ナイン郵便箱」は、女性だけのコミュニケーションの場が存在していなかった当時、女性が共感しあえる場の必要性を認識させたと言える。【図 12】

4-2 「Art サロン」、「新人作家募集」

『九番目の神話』は定期的の記事だけではなく、毎号新しい企画の記事をも掲載した。2号での「Art サロン」というコーナーでは、「ナイン」のメンバーたちが、ダンスと音楽、文学、映画と美術といったジャンルから自分の好きな作品を紹介している。単純な感想もあったが、『九番目の神話』の読者が共感できる、漫画以外のジャンルを紹介することを通して、女性の共感の場を作ろうという意図も伺える。【図 13】【図 14】【図 15】【図 16】

また、1号では最初の新人漫画募集を行い、2号では選出した新人作家を批評し、その作品を紹介した。そうすることで実力を持つ新人作家を発掘したと言える。批評においては、純情漫画なので、綺麗な絵が重要視されたが、コマ構成や、物語を伝達する力も評価基準となっていた。このような「ナイン」の活動は、単に純情漫画が女性をターゲットにした綺麗な漫画であるという概念から脱皮しようとする努力を見せている。さらに、純情漫画作家のデビューの場が少なかった当時、『九番目の神話』の新人作家募集は、デビューを目指す人たちにとり、とても重要であった。この作家育成は読者の増加にも貢献し、純情漫画の領域を広げることにつながった。【図 17】

このような同人誌『九番目の神話』の実験やその成功は韓国初の純情漫

31 ナイン、1985年、p. 257。

画雑誌『ルネサンス』の創刊に寄与したと考えられている。『ルネサンス』はどういった点で、『九番目の神話』による女性のコミュニケーションの場としての役割と関連していたかを検証するため、以下で『九番目の神話』と『ルネサンス』の創刊号を比較する。

5 『九番目の神話』と『ルネサンス』創刊号の比較からみる女性のコミュニケーションの場としての役割

1988年の『ルネサンス』の創刊は純情漫画の雑誌ブームを開いた。『九番目の神話』がその原動力になったことは、前述したパク・インハ、ソン・サンイクの出版物にも認めることができる。

その例として『九番目の神話』と『ルネサンス』創刊号を比較してみると、前者に作品を掲載したキム・ヘリン(김혜린)、キム・ジン(김진)、ゴ・サンハン(고상환)、シン・イルスク(신일숙)、ファン・ソンナ(황선나)、ファン・ミナ(황미나)といった作家が『ルネサンス』にも作品を掲載したことが分かる。また、作家が共通しているだけではなく、記事にも『九番目の神話』と『ルネサンス』の類似性が確認できる。【表1参照】

表1で『ルネサンス』創刊号の記事を挙げているが、「イ・ヒョンセのカチ通信」、「創刊お祝いのメッセージ」、「ハイキングのコースベスト10」、「お笑いジョン・ユソンの生きていく物語」、「ファン・ミナのミュージックアルバム」、「創刊記念祭」、「クロスワード」、「芸能アンテナ」、「愛の星占い」、「読者の広場」に加え、特別企画としての「漫画家がデザインしたファッション Best7 チャ・ソンジン」が掲載されている。

『ルネサンス』の記事の中で、「創刊お祝いのメッセージ」と「創刊記念祭」は創刊号であるため、掲載されたとしても、「芸能アンテナ」、「愛の星占い」、「読者の広場」は毎号に固定で掲載する記事である。その中で、「読者の広場」の場合、読者の意見だけではなく、読者が描いた絵も募集することは『九番目の神話』1号で募集広告が掲載された「ナイン郵便箱」とは異なるが、その性格においては類似している。また、「芸能アンテナ」をみると、放送、映画、演劇、アルバム、新刊などを紹介することは、『九番目の神話』の「Art

サロン」の記事の性格と非常に類似しているし、「ファン・ミナのミュージックアルバム」コーナーは作家の好きな音楽を紹介する企画意図においても、その役割が対当する。【図 18】【図 19】

『ルネサンス』は『九番目の神話』のように女性のコミュニケーションの場を提供しており、韓国の純情漫画を既存の一方通行的形式から脱皮させる役割を果たしていた。掲載記事の類似点からみると、『九番目の神話』から『ルネサンス』へ作家が移っていただけではなく、女性のコミュニケーションの場という役割においても、『九番目の神話』はその起源であったのである。

6 終わりに

本論では純情漫画の概念と韓国漫画雑誌をみることで、純情漫画が1950年代末から存続していたにも関わらず、雑誌の存在が他の漫画に比べて、その発展が著しく遅れていたことを確認した。これは純情漫画が、周辺的な位置づけにあったことを示している。このような点から、純情漫画の位置づけの変化に重要な役割を果たした『九番目の神話』に注目した。

そのため、『九番目の神話』に掲載された記事と取材を確認した。その結果、1980年代の純情漫画の出版形態によって不可能だった作家と読者との相互コミュニケーションと共感の場を作ったことがわかった。さらに韓国の純情漫画初である『ルネサンス』創刊号を比較することにより、『九番目の神話』の作家がその後『ルネサンス』に移っただけではなく、作家と読者とのコミュニケーションの場としての役割においても、『九番目の神話』の影響があったことが確認できた。

同人誌『九番目の神話』は、貸本でなく所有することができ、さらに一冊で多様な作品を読めるだけでなく、作家と読者の相互コミュニケーションの場としても機能していたことにより、1990年代における純情漫画雑誌の全盛期を引き起こし、純情漫画を主流として認識させたことに貢献したと言えるだろう。

しかしこのように『九番目の神話』が女性漫画を定着させることに寄与

したにも関わらず、関連する研究は非常に少ない。

今後、時代的影響における『九番目の神話』の作品を分析することで、韓国の純情漫画史において『九番目の神話』が持つ役割をさらに検討する必要がある。

参考文献

押山美知子『少女マンガジェンダー表象論』彩流社、2007年。

米沢嘉博『戦後少女マンガ史』筑摩書房、2007年。

キム・ソウォン「純情漫画の原点としてのオム・ヒジャー少女漫画特有の表現との関係から」『日韓漫画研究』、ベルント、山中千恵、任蕙貞共編、京都精華大学国際マンガ研究センター、2013年、pp. 61-75。

ソン・サンイク(손상익)『韓国漫画通史(한국만화통사)』(下)、シゴンサ、1998年。

チュ・グックヒ(秋菊姫)「失われた声を探って—軍事政権期における韓国の純情漫画作家たちの抵抗と権利付与」、『越境するポピュラーカルチャーリコウランからタッキーまで』、谷川建司、王向華、呉咏梅編、青弓社ライブラリー、2009年、pp. 47-79。

ナイン(나인)

『九番目の神話(아홉번째 신화)』1号、1985年。

『九番目の神話(아홉번째 신화)』2号、1986年。

『九番目の神話(아홉번째 신화)』3号、1987年。

パク・インハ(박인하)

『誰がキャディをひっかけたか(누가 캔디를 모함했나)』サルリム、2000年。

「韓国のデジタル漫画の歴史と発展の方向性についての研究(한국 디지털 만화의 역사와 발전 방향성 연구)」、『アニメーション研究』Vol.7 No.2、韓国アニメーション学会、2011年、pp. 64-82。

参考ウェブサイト

ネイバーキャスト、ファン・ミナのインタビュー :http://navercast.naver.com/contents.nhn?rid=27&contents_id=275 (最終確認 2015年1月5日)

「キム・ヘリンの作品の世界」ホームページ、『ハンギョレ新聞』インタビュー、1993年6月3日 :<http://www.kimhyerin.com/profile.html> (最終確認 2015年1月5日)

「そのときを知りますか」、ネイバーカフェ :<http://cafe.naver.com/mamj8836/13206> (最終確認 2015年1月5日)

韓国コンテンツ振興院ホームページ :<http://koreancontent.kr/778> (最終確認 2015年1月5日)

韓国漫画振興院ホームページ :<http://www.komacn.kr/dmk/index.asp> (最終確認 2015年1月5日)

